

# 専門情報教育と一般情報教育の一体型運用

本田 直也\*1・近藤 伸彦\*2・川口 宏海\*1  
Email: honda@otemae.ac.jp

\*1: 大手前大学現代社会学部  
\*2: 大手前大学 CELL 教育研究所

◎Key Words 情報教育, リベラルアーツ, カリキュラム

## 1. はじめに

大手前大学（以下、本学）では全ての学生が制限なく全学部の授業を履修可能とする学部クロスオーバーの仕組みをとり、全ての専門学習を通して教養を身に付けるリベラルアーツ型大学を実現した。

以前の情報分野の科目は、その課程に在籍する学生のためだけに特化した専門教育であったが、現在は全ての情報専門科目が全ての学生向けに開放されており、専門情報教育と一般情報教育の2面性を有している。

このようなカリキュラムにおいては、単にその分野に特化した専門知識や専門技術、専門研究の基礎を身に付けるだけでなく、分野を超えても通用する汎用的な学力や能力の修得が重要となる。その汎用能力として挙げられるものは、アカデミックスキル、基礎学力、一般常識、社会人基礎力、就業力などがある。

本稿では、大手前大学がどのように教養教育型の情報教育を展開してきたのか、どのようにその実績を可視化してきたか、そして現在の課題は何か、といった点について述べる。

## 2. カリキュラム

本学では2006年度まで存在していた全2学部5学科を統合する形で改組し、2007年度より3学部3学科の構成とし、学部・学科の垣根を低くした3学部クロスオーバー型のカリキュラムを編成した<sup>(1)</sup>。学生は入学学部によらず、全学部の全授業が履修可能である。全ての科目は各課程の専門科目であると同時に、汎用的能力が身につく教養科目としての側面も同時に持ち合わせている。

情報系科目を例に挙げると、情報専攻課程を修めるつもり学生にとっては情報技術と情報分野の学問を究める学習機会として情報系科目を履修する。一方、情報分野以外の専攻課程を修めるつもり学生を含むあらゆる学生にとって、情報系の科目を履修し、学ぶことで、大学生活で必要となる情報リテラシーを修得したり、大学や社会で有用な情報活用力を身に付けたり、ものの見方、考え方、価値観といった教養を体系的な学習の中で身に付ける。

以前は専門情報課程を修める学生向けの専門科目と、全学部対象の共通教育科目としての一般情

報科目をそれぞれ分けて開講していたが、現在はその区別が無く、一本化し、一体的に運用している。科目や課程の構成概念を図1に示す。現カリキュラムの特徴は、学部と専攻課程の垣根が低く、あらゆる学生に科目を提供し開講している。

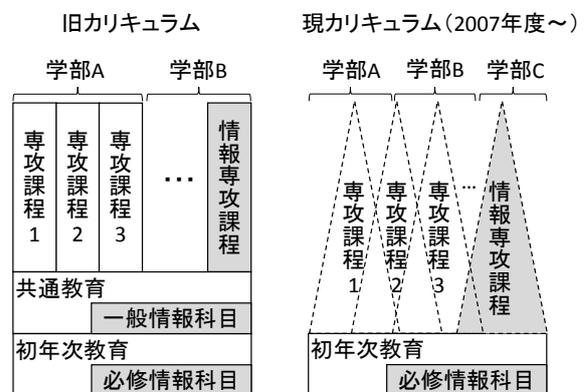


図1 新旧カリキュラム概念図

全ての科目は原則として履修制限を設けず、全学部、全学年の学生を対象に開講している。学部順序や専門の深さを示す度合いとして、レベルナンバー制を導入しており、科目には100, 200, 300, 400のいずれかのレベルが割り振られている。

## 3. 育成モデル

### 3.1 質保証のための学士課程デザイン

中央教育審議会大学分科会 制度・教育部会が2008年3月に公表した「学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)」では、「3つの方針」を明確にした教学運営が重要であると示されている。本学で掲げたディプロマポリシーを実現するために、教育の質保証を目指した「学士課程教育のグランドデザイン」を設計し、それに基づく教学運営を行っている<sup>(2)</sup>。

「学士課程教育のグランドデザイン」では、能力や自己の状態を表す項目縦軸と、学年進行を表す時間横軸の2次元表で表記されている。具体的な項目は、「生命力、希望」「自己教育」「知的誠実性」「基礎学力」「キャリア選択」「ライティング能力」「外国語コミュニケーション力」「情報活用力」「一般常識(時事問題など)」「読書(情報検索)」「資格」「実践」「メジャー(自分で創る専門性)」「C-PLATS(社会人基礎力)」である。

学年 学期	1年次		2年次		3年次		4年次	
	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期
情報活用力 (検索、管理、 分析、表現)	・レポート作成やプレゼン発表を行うためのPC操作、インターネットの活用、図書館資料の活用についての最低限のスキルが身につけている		・同左のレベルを上げ、ゼミナール遂行に支障のないレベルに達している		・同左のレベルを上げ、卒業研究遂行に支障のないレベルに達している		・同左のレベルを上げ、大学院進学や就職に支障のないレベルに達している	
							・ITパスポート取得 or Rasti 550点	

図2 学士課程教育のグランドデザインにおける情報活用力

### 3.2 情報活用力育成モデル

本稿で特に注目する能力育成項目である「情報活用力」について、その内容を図2に示す。1年次に必要な能力は、初年次必修科目である「情報活用」や「キャリアデザイン」の中で実践的に鍛えている。2年次以降はあらゆる科目での学習を通して、総合力としての情報活用力を鍛えている。それぞれの学生の選択次第であるが、情報専攻課程に属する科目を学生は履修することで、特に情報活用力を鍛え、伸ばすことができる。

学生が様々な学びを通して、最終的には大学卒業時に情報処理に関する国家試験である「ITパスポート」合格、または、情報活用力診断テスト「Rasti」で550点以上獲得することができる状態を目指している。本学では全ての学生を対象に「Rasti」受験を行い、全学生のデータを把握している<sup>9)</sup>。

## 4. 情報専攻課程

本学のカリキュラム構造の枠のなかで、多くの学生の情報活用力育成を担う一般情報教育と、卒業時に専門情報を修めることができる専門情報教育を同時に満たす情報専門課程を構築し、これまで運営を行ってきた。表1は現在も本学で開講している情報専門課程の科目群と科目名である。なお、表1の体系は2013年度入学(2017年3月卒業予定)以前の学生に提供しているもので、2014年度入学以降の学生は若干異なる体系と科目名で提供している。表1には含めていないが、初年次必修科目の「情報活用」や、情報分野で卒業研究と卒業論文執筆を目指す「ゼミナール」や「卒業研究」なども科目も存在している。

表1の上段ほどレベルナンバーが浅く、下段に行くにつれて深い専門の科目であることを意味している。特にレベルナンバー100、200の科目は全学部の学生に向けて門戸を開いている科目である。

## 5. 問題点と今後の課題

ここまで述べてきたように、情報専攻課程の授業は一般情報教育の側面も有しており、幅広く全ての学生に履修してもらいたいという意図で設計し、運用しているが、現実にはそのような学生の動きには必ずしもなっていない。情報分野に興味を持ち、それなりに情報活用力を身に付けている学生は本課程の授業を履修するものの、情報分野を苦手とする学生は情報分野の学習を避けてしまう傾向にある。

3.2で述べたRastiの受験結果などを用いて、学生一人一人に情報活用力の育成を促し、好き嫌いではなく、自分のため、将来のために情報分野を履修するように促していかなければならないと考えている。

表1 情報専門課程の科目群と科目名

科目群と科目名	レベル
<情報専攻入門> 情報と社会 インターネットの世界	100
<情報技術と仕事> 文書作成演習応用 表計算演習基礎 仕事とコンピュータ	200
<情報の管理と発信> データベース演習基礎 インターネット活用 Webサイト制作基礎	200
<情報とマルチメディア> マルチメディア演習 マルチメディア表現 プログラミング演習基礎	200
<情報システムの管理と技術> 情報システム戦略 情報システム管理 情報システム技術	200
<情報システムと社会> データベース概論 データベース応用演習 Webサイト制作応用	300~400
<情報活用の応用> 表計算実践演習 情報管理論 プログラミング演習応用	300~400

## 6. おわりに

本稿では本学のカリキュラム構造と、本学が定める学士課程教育のグランドデザインに沿った専門情報課程の構築と運用について述べた。

今後は、長年蓄積したデータから、学生の学習傾向と情報活用力との関係について分析し、今後の学習指導に活かすつもりである。

## 参考文献

- (1) 浦畑育生ほか：“学士課程教育へのアプローチをどのように進めるか—リベラルアーツ教育への転換と試行（第一報）”，大学教育学会誌，31巻，1号，pp.22-28（2009）。
- (2) 近藤伸彦：“学士課程教育のグランドデザインに基づく質保証のための取り組み”，大手前大学CELL教育論集，第4号，pp.17-22（2013）。
- (3) 本田直也，近藤伸彦，吉川聡：“初年次情報教育における情報活用力試験の結果と就職先職種別分析”，PCカンファレンス2014年度全国大会，pp.100-103（2014）。